福島大学
地域未来
デザインセンター

相双地域支援
サテライト

相双の風

Vol. 44

2026年1月号

「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。
相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。

TOPICS ｜ トピックス

浪江町で津波避難訓練
傷病者搬送講習や炊き出しも

津波避難訓練では豚汁の炊き出しも行われた

「津波防災の日」の2025年11月5日、浪江町主催の津波避難訓練が実施されました。沿岸地域の住民ら45人が参加、津波警報を知らせる防災行政無線を合図に幾世橋防災コミュニティセンターへ避難しました。

同センター内で浪江消防署による毛布を使った傷病者搬送の講習が行われたほか、県職員がブースを設けて福島県防災アプリの利用方法を案内するなどしました。屋外では住民有志が中心となり、豚汁などの炊き出しを行いました。

戸浪義勝総務課長は「避難が円滑にできていた。町としての課題も見えたので、引き続き改善を進めていきたい」と講評。参加した住民の一人は「学んできた防災の経験が心のゆとりにつながった。住民の皆さんにも協力していただいてよかった」と話していました。

訓練には相双地域支援サテライトのスタッフも加わり、今後も浪江町の防災コミュニティ形成に向けた取り組みを継続していく思いを新たにしました。

▲ 避難訓練を講評する戸浪義勝総務課長

地域と歩む 福大

ニーズある限り能登半島を支援
（学生団体）福島大学災害ボランティアセンター

▲ 七尾市でボランティア活動を終えた災ボラのメンバーら

学生団体の福島大学災害ボランティアセンター（災ボラ）は東日本大震災を契機に発足し、現在も県内の復興公営住宅でサロンを開いたり、楢葉町で子どもの放課後支援やキャンプ活動を行ったりしています。

2024年1月、能登半島地震の発生を受けて募金活動を展開。2月にゼネラルマネージャー（GM）の藤島大右さんが七尾市などを視察した後に2週間ほど滞在し、3月11～13日に約30人が参加した福島大学のボランティアバスの受け入れもしました。その後も災ボラは月に1度のペースで被災家屋の片付けや仮設住宅での足湯などを実施。9月に発生した豪雨災害では、輪島市などで被災した家屋から泥出しなどを行いました。

▲ 2024年3月、雨の中、被災家屋の片づけを行う藤島さん（右）

25年になってからも2カ月に1回の頻度で現地を訪問しています。GMの藤島さんは「今後も人手が必要な限りは支援を続けたい」といい、26年3月にも活動する予定です。

相双地域支援サテライトの活動

地域復興支援

▲ 写真スタジオで撮影を楽しむ参加者ら

▲ とみおかワイナリーで記念撮影

新旧住民が富岡町の新施設巡る

富岡町内に新しくできた施設など9カ所を大型バスで巡るイベント「とみおかまちめぐり」を2025年10月4日に行い、移住者や帰還住民、町出身者ら15人が参加しました。

富岡漁港の「ぶらんこ広場」からスタート。交流施設「トータルサポートセンターとみおか」のフィットネスルームで実際に運動機器に触れ、夜の森地区ではおしゃれなリメークデニム専門店で買い物を楽しんだり、バラの栽培施設を見学したりしました。

また、中心街で銀行の元店舗に入居する写真スタジオを訪問。金庫室だった部屋やハロウィンの撮影ブースなどで各自がスマートフォンを手に写真を撮り合いました。締めくくりには25年5月にオープンした「とみおかワイナリー」で購入したワインやブドウジュース、おつまみなどをみんなで味わいました。

駆け足の見学でしたが、町内には予想以上に「見応えがあり魅力的な」場所が多いことに気づき、同時に参加者の皆さんが交友関係を広げた実り多い一日となりました。

▲ 相双地方観光の課題を語る松澤ダンフォードさん

相馬市で相双地方の「観光」を考える市民講座

2025年11月17日に相馬市民会館で、市民講座「相双地方のこれからの『観光』を考える」を開催しました。全国通訳案内士の松澤ダンフォード亜美さんを講師に迎え、行政職員など25人が参加しました。

松澤さんは講演で、富裕層によるインバウンド（訪日旅行者）市場の拡大を踏まえ、相双地方に誘客するための観光戦略を解説。「富裕層の観光は、その地域だからこそできる特別な体験と長期滞在を重視しており、経済効果に加えてオーバーツーリズム対策としても期待される」などと話しました。

一方で相双地方の現状を見ると、交流サイト（SNS）などでのリアルな体験談の発信が不足しており旅行先として「発見」されづらく、多世代への配慮や食文化の選択肢、多言語対応といった受け入れ態勢の面で不安があるとも指摘しました。

講演後は、相双地方の「発見」につながる体験プログラムの開発や発信方法を話題に参加者同士で議論し、観光戦略について理解を深める機会となりました。

お知らせ 帰還困難区域の今を紹介するパネル展を開催します

相双地域支援サテライトは2～5月、パネル展「原発事故15年　福島『帰れない』家　帰還困難区域の今」を東京と福島で開催します。帰還困難区域に取り残された「帰れない」家に一時帰宅する原発事故避難者5人に同行し、写真とドキュメンタリーで同区域の今とそれぞれの人生を伝えます。

■隅田公園リバーサイドギャラリー（東京都台東区花川戸１丁目1-1）
2026年2月3日（火）～2月8日（日）9:00-17:00（最終日15:00まで）

■東京ボランティア・市民活動センター（東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ10階）
2026年2月4日（水）～3月15日（日）
火～土 9:00-21:00 日9:00-17:00（最終日15:00まで） 月曜・祝日は休館

■福島大学附属図書館（福島県福島市金谷川1）
2026年4月10日（金）～5月15日（金）
平日9:00-20:45 土日11:00-18:00（最終日15:00まで） 4/29、5/3-6は休館

「相双の風」44号
読者アンケートにご協力ください

相双の風 vol.44
2026年1月発行

発行／福島大学地域未来デザインセンター
相双地域支援サテライト
〒960-1296 福島市金谷川1

〔金谷川キャンパス〕TEL：024-504-2834
〔富岡サテライト〕TEL：0240-23-6675
〔浪江サテライト〕TEL：0240-23-5970
https://satellite.net.fukushima-u.ac.jp/

特集

能登半島地震と楢葉の子どもたち

石川県輪島市や珠洲市などで甚大な被害を出した能登半島地震。東京電力福島第一原発事故で被災した楢葉町の児童、生徒たちは地震発生の2024年から輪島市門前町の住民や商店街への支援を続けています。子どもたちが被災地同士の交流から学んだものや、門前町の人たちの思いとは―。この間の軌跡を振り返ります。

相双地域支援サテライト
キャラクター そうそうくん

踏み出した「支援から学びへの一歩」

足湯や防災食ワークショップ

原発事故に伴う全町避難を経験した楢葉町では、2017年に町内で公立学校が再開し、地域と共に歩む教育が進められてきました。22年には全国で初めて「地域学校協働センター」を開設し、震災の記憶を学びにつなげる防災教育に力を入れてきました。しかし、多くの子どもたちは震災後に生まれた世代であり、「自分事」として災害を捉えることは容易ではありませんでした。

そのような中、24年1月に能登半島地震が発生。センター職員が輪島市門前町を訪れたことをきっかけに、楢葉町と門前町の交流が始まりました。募金活動や応援メッセージの送付などから広がり、同年12月には小学生と中学生の3人が初めて現地を訪問。つぶれたままの家屋や仮設住宅での暮らしを目の当たりにし、大きな衝撃を受けました。交流会では楢葉の郷土料理「マミーすいとん」を一緒に作り、足湯活動も行い、門前の人々から「元気をもらった」との声が寄せられました。

▲ 2024年12月、郷土料理「マミーすいとん」作りで交流する楢葉の子ら

▲ 2025年9月、門前マルシェに共同出店した楢葉中と門前中の生徒たち

楢葉中生「門前マルシェ」に出店

この経験を通して、子どもたちは「支援を続けたい」と自らプロジェクトを立ち上げました。その一つが「縁日」を開催することです。これは25年9月、総持寺通り商店街で定期開催される「門前マルシェ」への出店という形で実現しました。楢葉の特産品サツマイモを使った防災食づくりワークショップを行い、限られた材料と時間で温かい食事を届ける工夫を紹介。参加者と一緒に調理しながら、防災時の備えや心構えについて対話が生まれたことも印象的でした。さらにこの日は、地元の市立門前中学校の生徒と共同出店し、準備や呼び込み、片づけまで同じテントで協力しました。世代の近い仲間と肩を並べて活動することで、支援が「一方的なもの」ではなく、互いに学び合う時間へと広がっていきました。

現地で見聞きした出来事は、子どもたち自身の「震災観」も変えていきました。生まれる前に起きた東日本大震災が、自分たちの町の出来事として実感を伴って理解できるようになり、楢葉に戻ってからも学校や地域で積極的に報告を行っています。能登で出会った人々の思いや困りごとを伝えることで、「自分たちにできることは何か」を周囲と共に考える機会も生まれました。

子どもたちは「次は自分たちだけでなく、もっと多くの人に能登を訪れてほしい」と話します。支援しながら学び、その学びを次につなげていく―。地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトはこれからも、子どもたちと共に、こうした継続的な関係づくりを進めていきます。

日常のつながりが支えた再出発

総持寺通り商店街の奮闘

▲ 毎月第2土曜に開かれる門前マルシェ。音楽のライブステージでも盛り上がる

曹洞宗大本山總持寺祖院のお膝元、石川県輪島市門前町の総持寺通り商店街は、地域と共に歩んできた歴史を持ちます。2021年の總持寺開創700年を機に観光客を主な対象にした活性化が進められてきましたが、コロナ禍により法要は縮小され、来訪者も激減しました。ようやくにぎわいが戻り始めた直後、24年元日の能登半島地震が起き、壊滅的な被害を受けました。

総持寺通り協同組合は設立から約60年。組合長の能村武文さん(68)は「自分たちが30代の時分はもっとにぎやかでした」、コミュニティマネージャーの宮下杏里さん(34)も「子どもの頃は人が行き交う楽しい場所でしたね」と往時を振り返ります。商店街は能登半島地震の前も高齢化や07年の能登地震を経て、やる気はあっても人手が足りない状況が続いていました。

そうした中でも、地域と次世代をつなぐ取り組みが芽生えました。定員割れで存続の危機にあった県立門前高校を盛り立てようと、商店街でも新商品やゆるキャラの開発などで生徒を仲間に迎えました。みんなでアイデアを出し合い、餅つき大会や雪かきなどで日頃から交流しています。商店街と学校が一体となった活動が日常的に根づいていったのです。

「楢葉の子に元気もらった」

この積み重ねがあったからこそ、震災後、外からの関わりも自然に受け止めることができました。その一つが東日本大震災の被災地・楢葉町との交流です。楢葉町の子どもたちが門前町を訪れ、応援の気持ちを届けました。子どもたちが日々の暮らしや思いを語る姿に、住民の多くが元気をもらったといいます。

一方、震災後の商店街再開を支える土台となったのが「門前マルシェ」です。21年に始まったこの取り組みは各店舗の軒先や駐車場に目玉商品を並べる特売市で、毎月第2土曜日に開かれています。「お店に1歩足を踏み入れにくいという観光客に、どうやったらこの魅力的な『能登人』=店主を会わせられるかを考えました」(宮下さん)

被災した店舗での営業が難しい状況でも、「マルシェならできる」という共通認識が再起を後押ししました。25年9月には楢葉中学校と地元門前中学校との共同出店も実現しました。日常の中で培われてきた仕組みがあったからこそ、新たな関係も無理なく築かれていったのです。

「住民の方から『店をやってよ』と言われたことが、一番の励みでした」と能村さんは語ります。物資だけでは満たされない“その人に必要な何か”を届けられる関係性。地域住民と商店街が持ちつ持たれつの、人情味にあふれる間柄だからこそ、ここまで歩んでくることができたのだといいます。復興への長い道のり―。能登でもまた、福島と同じように人と人とのつながりが、次の一歩をほのかに明るく照らしているのです。

「能登と東北をキャンドルでつなぐ」協力者募集

「能登と東北をキャンドルでつなぐプロジェクト」では、協力者を募集しています。輪島市門前町の中高生たちが總持寺祖院で役目を終えたろうそくを再利用してキャンドルを手作りしているのにならい、東北でも廃棄ろうそくを原料に同様の活動をします。能登と東北でキャンドルを贈り合い、それぞれの被災の日に灯すことで、祈りと記憶を次の世代へ受け渡していきます。材料提供や活動参加など、関心のある方・ご賛同くださる方は、ぜひ当サテライト(電話0240-23-5970)までご連絡ください。

福島大学公式
マスコットキャラクター
めばえちゃん